

御物本『更級日記』の仮名字体について

佐々木 勇

〇、本稿の目的

菅原孝標女（一〇〇八—没年未詳）が一〇六〇年頃に書いたとされる『更級日記』に、孝標女自筆本は伝わらない。平安時代成立の現存文献にもその書名を見出せず、藤原定家（一一六二—一二四一）の『明月記』寛喜二年（一二三〇）六月十七日の条に出るのが初出例である。

このことは、京都御所内に保管されている藤原定家筆御物本『更級日記』が唯一の証本であることと無関係でなからう（注1）。

この御物本『更級日記』は、大正十三年に佐佐木信綱により発見された。その後、玉井幸助が詳細に調査し、補修の際に綴じ誤りによって錯簡が生じたことを明らかにした。そして、現存諸本はすべて、この御物本の錯簡を反映していることから、いずれも御物本を祖本とすることが判明した（注2）。

よって、現行教科書の『更級日記』本文が、平安時代成立時の本文をどの程度伝えているものか、知るべきがない。

本稿は、御物本『更級日記』の仮名字体が、いつの・いかなるものであるかを考察することを目的とする。

一、考察の方法

菅原孝標女自筆『更級日記』ばかりでなく、孝標女自筆文献は、残っていないらしい。そのため、御物本『更級日記』仮名字体と孝標女自筆文献との、仮名字体の直接比較はできない。

しかし、近年の仮名字体研究によつて、同時代であっても、実用的文章と文学的文章とは、字母（仮名のもととなった万葉仮名用法の漢字）と字体（文字の骨組み）とが異なっていたことが明らかにされてきた（注3）。

そこで、御物本『更級日記』の仮名字体を、成立時である一〇六〇年頃と定家書写時の一二三〇年頃の、実用的文章および文学的文章それぞれと比較し、その字母と字体とがそれらの内どれに近いかを見る方法によつて、御物本『更級日記』の仮名字体がいつの・いかなるものであるかを考察する方法を採る。

まず、仮名字母数・字体数を比較し、御物本『更級日記』のそれと近いものについて、それらの仮名字母数を比較することとする。

二、御物本『更級日記』の仮名字体

御物本『更級日記』の仮名字体を一覧表にすれば、左のとおりである。異なり仮名字母数は、九十二字である（注4）。

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | ア | カ | ナ | タ | ナ | ハ | マ | ヤ | ラ | ワ | ン |
| あ | あ | か | な | た | な | は | ま | や | ら | わ | ん |
| イ | イ | キ | シ | チ | シ | ヒ | ミ | | リ | キ | |
| い | い | き | し | ち | し | ひ | み | | り | き | |
| ウ | ウ | ク | ス | ツ | ス | フ | ム | ユ | ル | | |
| う | う | く | す | つ | す | ふ | む | ゆ | る | | |
| エ | エ | ケ | セ | テ | セ | ヘ | メ | ヰ | レ | エ | |
| え | え | け | せ | て | せ | へ | め | ゐ | れ | え | |
| オ | オ | コ | ソ | ト | ソ | ホ | モ | ヨ | ロ | ヲ | |
| お | お | こ | そ | と | そ | ほ | も | よ | ろ | を | |

三、仮名字母数・字体数の比較

1. 一〇六〇年頃の实用的文章における仮名字体

一〇六〇年頃の文書など实用的文章として、一〇八五年頃書写『不空三蔵表制集』紙背消息(第三十三通)の仮名字体表を引用する。

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ワ | ラ | ヤ | マ | ハ | ナ | タ | サ | カ | ア |
| | ら | や | ま | は | な | た | さ | か | あ |
| キ | リ | | ミ | ヒ | ニ | チ | シ | キ | イ |
| | り | | み | ひ | に | ち | し | き | い |
| | | ル | ム | フ | ヌ | ツ | ス | ク | ウ |
| | | る | む | ふ | ぬ | つ | す | く | う |
| エ | レ | | メ | ヘ | ネ | テ | セ | ケ | エ |
| | れ | | め | へ | ね | て | せ | け | え |
| ヲ | ロ | ヨ | モ | ホ | ノ | ト | ソ | コ | オ |
| | | よ | も | ほ | の | と | そ | こ | お |

① 一〇八五年頃書写『不空三蔵表制集』紙背消息(第三十三通)

(矢田勉『国語文字・表記史の研究』59頁より引用。)

文量が少ないことを考慮しても、御物本『更級日記』と比較して、異なり字母数・字体数が著しく少ない。

2. 一二三〇年頃の实用的文章における仮名字体

次に、一二三〇年頃の实用的文章の仮名字体として、親鸞自筆消息全十二通の仮名字体表を引用する。

② 親鸞(一一七三年—一二六二年)自筆消息全十二通(一二四三年—一二六二年の間に書写)

| | | | | | | | | | |
|---|---------|---|---------------|---------------|---------------|---------------|-------------|-------------|-------------|
| ワ | ラ | ヤ | マ | ハ | ナ | タ | サ | カ | ア |
| わ | ら | や | ま まは まは | は はは はは | な なな なな | た たを たを | さ さ さ | か か か | あ あ あ |
| ヰ | リ | | ミ | ヒ | ニ | チ | シ | キ | イ |
| ゐ | り りわ | | み みみ | ひ ひん | に にふ | ち | し しき | き | い |
| | | ル | ユ | ム | フ | ヌ | ツ | ク | ウ |
| | | る | ゆ | む むん | ふ | ぬ ぬつ | す | く く | う |
| エ | レ | | メ | ヘ | ネ | テ | セ | ケ | エ |
| ゑ | れ れま | | め め先 | へ | ね | て | せ せき | け けり | え え江 |
| ヲ | ロ | ヨ | モ | ホ | ノ | ト | ソ | コ | オ |
| を | ろ | よ | も もき | ほ ほか | の の代 | と | そ そろ | こ こ太 | お お太 |

(矢田勉『国語文字・表記史の研究』199頁より引用。)

②は①に比べ、異なり字母数が増えているとはいえ、全七〇に過ぎない。やはり、御物本『更級日記』の字母・字体数には及ばない。

3. 一〇六〇年頃の文学的文章における仮名字体

築島裕は、『仮名』(『日本語の世界』5)一九八一年、中央公論社)で、源兼行(一〇二四—一〇七四)書写と推定されている『古今和歌集』高野切の仮名字体は、同期の文書類と大きく異ならない、と述べる。その異なり字母数は六五である。

下に、築島裕右著書から、『古今和歌集』高野切巻第五の仮名字体表を引用する。

この表で、仮名の右に引用者が傍線を引いた字体が、同期の文書類に見られない仮名字体である。それらは、ごく僅かである。

③『古今和歌集』高野切巻第五

| | | | | | | | | | |
|---|---------|---|---------|---------------|---------------|---------------|-------------|-------------|-------------|
| ワ | ラ | ヤ | マ | ハ | ナ | タ | サ | カ | ア |
| わ | ら | や | ま まま | は はは はは | な なな なな | た たを たを | さ さ さ | か か か | あ あ あ |
| ヰ | リ | | ミ | ヒ | ニ | チ | シ | キ | イ |
| ゐ | り りわ | | み みみ | ひ ひん | に にふ | ち | し しき | き | い |
| | | ル | ユ | ム | フ | ヌ | ツ | ク | ウ |
| | | る | ゆ | む むん | ふ | ぬ ぬつ | す | く く | う |
| エ | レ | 江 | メ | ヘ | ネ | テ | セ | ケ | 衣 |
| | れ れれ | | め め先 | へ | ね | て | せ せき | け けり | え え江 |
| ヲ | ロ | ヨ | モ | ホ | ノ | ト | ソ | コ | オ |
| を | ろ | よ | も もき | ほ ほか | の の代 | と | そ そろ | こ こ太 | お お太 |

(築島裕『仮名』179頁に依る。)

4. 一二三〇年頃の文学的文章における仮名字体

④定家筆『古今和歌集』嘉禄二年(一二二六)書写本

左は、定家筆『古今和歌集』嘉禄二年(一二二六)書写本の仮名字体表である。仮名字体の下の数は使用度数、その下の()内はその音節を表示する仮名全体の延べ数に対する割合である。児玉奈月『藤原定家書写本「古今和歌集」における文字遣いに関する研究』(平成二十年度本学本コース卒業論文)から、一部訂正の上、引用した。

定家筆『古今和歌集』嘉禄二年本の異なり字母数は、八五である。この数は、御物本『更級日記』の異なり仮名字母数に近い。

| | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 号 836 | シ 745 | シ 594 | 元 123 | カ 509 |
| 号 828 (99.1%) | シ 725 (97.2%) | キ 594 (100%) | 元 117 (96.2%) | カ 509 (100%) |
| 号 8 (0.9%) | シ 20 (2.8%) | | 元 6 (3.8%) | |
| 号 2236 | シ 1138 | キ 1034 | 元 1239 | カ 1010 |
| 号 1897 (90.8%) | シ 1135 (99.7%) | キ 1035 (100%) | 元 992 (80%) | カ 1070 (100%) |
| 号 448 (19.2%) | シ 2 (0.2%) | | 元 173 (14%) | |
| | シ 1 (0.1%) | | 元 74 (6%) | |
| 号 810 | シ 1994 | キ 856 | 元 312 | カ 665 |
| 号 609 (75.1%) | シ 1767 (88.6%) | キ 784 (91.9%) | 元 310 (99.4%) | カ 665 (100%) |
| 号 201 (24.9%) | シ 227 (11.4%) | キ 72 (8.4%) | 元 2 (0.2%) | |
| 号 1349 | シ 582 | キ 1074 | 元 1292 | カ 1747 |
| 号 1188 (88.1%) | シ 558 (95.9%) | キ 838 (78%) | 元 1290 (99.8%) | カ 1747 (100%) |
| 号 150 (11.1%) | シ 23 (4%) | キ 235 (21.8%) | 元 2 (0.2%) | |
| 号 13 (0.9%) | シ 1 (0.1%) | キ 1 (0.1%) | | |
| 号 1534 | シ 2040 | キ 454 | 元 313 | カ 3227 |
| 号 1529 (99.3%) | シ 1972 (96.7%) | キ 454 (100%) | 元 294 (93.9%) | カ 3183 (98.6%) |
| 号 26 (1.7%) | シ 15 (0.7%) | | 元 21 (6.1%) | カ 44 (1.4%) |
| 号 2043 | シ 815 | キ 713 | 元 641 | カ 303 |
| 号 1486 (72.7%) | シ 426 (52.3%) | キ 457 (64.1%) | 元 641 (100%) | カ 199 (62.7%) |
| 号 456 (22.3%) | シ 357 (43.8%) | キ 256 (35.9%) | | カ 113 (37.3%) |
| 号 101 (5%) | シ 32 (3.9%) | | | |
| 号 892 | シ 1004 | キ 644 | 元 595 | カ 1181 |
| 号 612 (69.4%) | シ 568 (56.6%) | キ 637 (98.8%) | 元 566 (95.1%) | カ 1181 (100%) |
| 号 242 (27.4%) | シ 357 (36.1%) | キ 8 (1.2%) | 元 29 (4.9%) | |
| 号 28 (3.2%) | シ 73 (7.3%) | | | |
| 号 560 | | キ 320 | | カ 935 |
| 号 560 (100%) | | キ 320 (100%) | | カ 935 (100%) |
| 号 1302 | シ 1444 | キ 1894 | 元 909 | カ 179 |
| 号 1302 (100%) | シ 1397 (96.7%) | キ 1893 (98.4%) | 元 908 (99.9%) | カ 179 (100%) |
| | シ 47 (3.3%) | キ 31 (1.6%) | 元 1 (0.1%) | |
| 号 376 | シ 45 | キ 52 | 元 1046 | カ 33 |
| 号 382 (98.9%) | シ 43 (95.6%) | キ 52 (100%) | 元 1047 (99.9%) | カ 33 (100%) |
| 号 4 (1.1%) | シ 2 (4.4%) | | 元 1 (0.1%) | |

定家は、繰り返し『古今和歌集』を書写している。全文が残っており、複製本が公刊されているものとして、他に、貞応二年（一二二二）本・伊達家旧蔵無年号本（一二二五年頃）がある。児玉氏の調査によると、この貞応二年本・伊達家旧蔵無年号本の仮名字体も、右の嘉禄二年本と大きく異なる（注5）。

以上の比較から、御物本『更級日記』の仮名字母数・字体数は、定家書写時の文学的文章のそれに近いことが知られた。

四、仮名字母の比較

御物本『更級日記』の仮名字母数・字体数は、定家書写時の文学的文章に近いものであった。

以下、御物本『更級日記』と定家書写時一二三〇年頃の文学的文章との、仮名字母の比較を行なう。

1. 定家筆御物本『更級日記』と『古今和歌集』嘉禄二年本との仮名字母の比較

定家筆御物本『更級日記』と定家筆『古今和歌集』嘉禄二年本の字母を比較してみると、ほぼ重なる。相違点は、左がすべてである。

（以下、仮名字母を〈 〉に括弧で示す。）

A. 御物本『更級日記』に無く、『古今和歌集』嘉禄二年本に有る仮名字母。（二一字）

〈年〉〈連〉

B. 御物本『更級日記』に有り、『古今和歌集』嘉禄二年本に無い仮名字母。（九字）

〈木〉〈支〉〈具〉〈古〉〈帝〉〈登〉〈婦〉〈衛〉〈乎〉

2. 定家筆御物本『更級日記』と『古今和歌集』嘉禄二年本との字

母相違の理由

ここでは、右で導かれた、定家筆御物本『更級日記』と『古今和歌集』嘉祿二年本とに、字母の相違が見られる理由を考察する。

A. 御物本『更級日記』に無く、『古今和歌集』嘉祿二年本に有る仮名字母 — (年) (連) —

この (年) (連) は、『古今和歌集』嘉祿二年本以外の文学的文章において用いられていた可能性がある。そこで、元永三年(一一二〇)本『古今和歌集』の仮名字体表を掲げる(注6)。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | あ | あ | イ | い | ウ | エ | オ |
| カ | か | キ | ク | ケ | コ | | |
| サ | さ | シ | ス | セ | ソ | | |
| タ | た | チ | ツ | テ | ト | | |
| ナ | な | ニ | ヌ | ネ | ノ | | |
| ハ | は | ヒ | フ | ヘ | ホ | | |
| マ | ま | ミ | ム | メ | モ | | |
| ヤ | や | | ユ | | ヨ | | |
| ラ | ら | リ | ル | レ | ロ | | |
| ワ | わ | ヰ | | ヱ | ヰ | | |
| ン | ん | | 給 | 奉 | 事 | | |

(築島裕『仮名』184頁に依る。)

右のとおり、(年) (連) ともに用いられている。

(年) は、応永十一年(一四〇四)以前書写『新古今和歌集』(鳥丸本)でも用いられており(注7)、文学的文章で使われ続けた仮名字体である。また、(連) は、定家筆『土左日記』・建久本『大鏡』・鎌倉後期筆『伏見天皇御集』・『新古今和歌集』(鳥丸本)で用いられている(注8)。次に引く⑥『源氏物語絵巻』詞書も両字体を使用する。

B. 御物本『更級日記』に有り、『古今和歌集』嘉祿二年本に無い仮名字母 — (木) (支) (具) (古) (帝) (登) (婦) (衛) (乎) —
これらも、他の文学的文章では使用されていた可能性がある。そこで、十二世紀以降の文学的文章における仮名字体を見る。

⑥『源氏物語絵巻』詞書(十二世紀前半書写)の仮名字体

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ア | あ | イ | ウ | エ | オ |
| カ | か | キ | ク | ケ | コ |
| サ | さ | シ | ス | セ | ソ |
| タ | た | チ | ツ | テ | ト |
| ナ | な | ニ | ヌ | ネ | ノ |
| ハ | は | ヒ | フ | ヘ | ホ |
| マ | ま | ミ | ム | メ | モ |
| ヤ | や | | ユ | | ヨ |
| ラ | ら | リ | ル | レ | ロ |
| ワ | わ | ヰ | | ヱ | ヰ |
| ン | ん | | 給 | 奉 | 事 |

(築島裕『仮名』186頁に依る。)

⑦西本願寺藏『三十六人集』（平安時代後期書写）の仮名字体

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | カ | サ | タ | ナ | ハ | マ | ヤ | ラ | ワ | ン |
| あ | か | さ | た | な | は | ま | や | ら | わ | ん |
| イ | キ | シ | チ | ニ | ヒ | ミ | | リ | キ | リ |
| い | き | し | ち | に | ひ | み | | り | き | り |
| ウ | ク | ス | ツ | ヌ | フ | ム | ユ | ル | 給 | |
| う | く | す | つ | ぬ | ふ | む | ゆ | る | 給 | |
| エ | ケ | セ | テ | ネ | ヘ | メ | | レ | エ | 奉 |
| え | け | せ | て | ね | へ | め | | れ | え | 奉 |
| オ | コ | ソ | ト | ノ | ホ | モ | ヨ | ロ | ヲ | 事 |
| お | こ | そ | と | の | ほ | も | よ | ろ | を | 事 |

（築島裕『仮名』187頁に依る。）

右のとおり、⑤⑥⑦の十二世紀における文学的文章には、〈支〉〈具〉〈古〉〈帝〉〈登〉〈婦〉〈衛〉〈平〉が使用されている（仮名字体表中に傍線を付した）。

右の十二世紀文学的文章仮名字体表には見られない〈木〉は、紀貫之本を字体まで正確に書写したと考えられる為家筆『土左日記』に見られる（それを写した青谿書屋本にもそのまま書写されている（注9））。加えて、藤原道長自筆『御堂関白記』中の和歌にも存するため、「或いは男性を中心に一部で用いられていた仮名字体であった可能性がある。」（注10）という。その字体を、定家が書写時に使用したものかもしれない。

以上、定家筆御物本『更級日記』と『古今和歌集』嘉祿二年本の仮名字体は、院政鎌倉時代の物語・和歌などの文学的文章における仮名字体として、ともに一般的なものであったと言える。

五、結論

以上の検討から、御物本『更級日記』は、菅原孝標女が一〇六〇年頃に書いた『更級日記』の仮名字体ではなく、一二三〇年頃に藤原定家が書写した時の仮名字体を用いていることが知られた。

また、その仮名字体は、定家書写当時の文学的文章として、特異なものではなかった。

定家は、独自の仮名遣（定家仮名遣）を用いたばかりでなく、底本の仮名字母・仮名字体を変更した（注11）。

しかし、その変更した仮名字体は、定家仮名遣のごとき独自のものではなく、当時の文学的文章として、一般的な字体であった（注12）。

注

(1) 『更級日記』は、ながく菅原家に保管され、菅原為長（孝標の六世）と昵懇であった藤原定家に見せられたのが、世に出るきっかけになったのではなからうか。

ただし、現存藤原定家筆『更級日記』の奥書「先年傳得此草子件本ノ為人被借失仍以件本書ノ写人本更書留之傳ノ之間ノ字誤甚多不審事等付朱ノ若得證本者可見合之ノ為見合時代勘付舊記等」から、御物本の底本は、菅原孝標女の書写本ではなく、少なくとも二度の転写を経た本である。

(2) 玉井幸助『更級日記錯簡考』（一九二五年、育英書院）、参照。

(3) 矢田勉『国語文字・表記史の研究』(二〇一二年、汲古書院)、参照。なお、本稿における「字母」「字体」は、本文中()内に記した意味で使用する。たとえば、**ろ**・**う**の字母は同一の「可」であり、字体は異なるとする。

(4) 『漢字講座 4』(一九八九年、明治書院)にも、御物本『更級日記』の仮名字体一覧表が掲げられている。本稿に掲げたのは、それとは異なる。本稿の筆者が作成したものである。

(5) 定家が古典書写にあたって、自らの仮名遣い(定家仮名遣い)を実践していたことは、早くから指摘されていた(大野晋「藤原定家の仮名遣について」(『国語学』72号、一九六八年三月)。本研究では、仮名字体も、原本のそれを変更していたことを指摘した。

(6) 本資料の仮名字体表は、『国語学大辞典』(一九八〇年、東京堂出版)の「平仮名」の項目(小林芳規執筆)にも掲げられている。しかし、小異が有る。

(7)(8) 小林芳規『図説 日本の漢字』(一九九八年、大修館書店)、参照。その他、矢田著書掲載消息類の仮名字体表にも、用例を指摘できる。

(9) この「木」を漢字と判断したと思われる字体表も公表されている。しかし、御物本『更級日記』の例は、「几帳」を〈木長〉と書いたものであり、漢字の「木」とは字形も異なる。

(10) 矢田勉『国語文字・表記史の研究』213頁。

(11) この点は、紀貫之自筆本を正確に書き写した為家筆『土左日記』と定家筆『土左日記』の仮名字体を比較すれば、明らかである。

(12) ただし、定家の「仮名字遣い」の同期文学的文章における位置づけは、すべて今後の課題である。

たとえば、鎌倉時代における文学的文章に、同一音節に比較的多くの仮名字体が必要であった理由を考察せねばならない。

定家書写本を用いた従来の研究では、同一字母隣接の回避、単語が分断されていることの行頭・行末における標示の機能が指摘されてきた(小松英雄『仮名文の原理』(一九八八年、笠間書院))。

しかし、そのような例外的な処理のためだけに、多数の字母が存在していたとは考えにくい。

さらに、右のような説明のみでは、「ろ・ぬ・や」など、多くの仮名文献を通じて、一字体のみの音節が存することを説明できない。

このような疑問点に対し、近年、次の二つの観点が指摘されている。

1. 単語によって決まった字母を使用している。

例)「けふ(今日)を(介不)と書く。(迫野虔徳「定家の「仮名もじ遣」」(『語文研究』37、一九七四年八月)、矢田勉『国語文字・表記史の研究』、参照。)

2. 語頭と非語頭の字母を区別する。

例) 語頭―(志)、非語頭―(之)(安田章「仮名資料序」(『論究日本文学』二九、一九六七年一月)、同「仮名字遣序」(『国語国文』一九七一年二月)、同「仮名資料」(『国語国文』一九七二年三月)、矢田勉『国語文字・表記史の研究』、参照。)

鎌倉時代の平仮名文において、右の例以外には、右の現象の具体例は指摘されていない。

(広島大学)